

俳句雜誌

空



2018・12

SORA 82号

空

平成30年12月31日発行

第16卷6号

通巻第82号

流星

柴田 佐知子

豊年や渋き顔して赤子覚む

牛の仔の睫毛を濡らす朝の霧

横向けば横へ来る人秋うらら

鳥獣の骨を蔵して紅葉山

流星をあまた入れたる井戸塞ぐ

菊の日や母のしづかな箸遣ひ

月光を浴びて神代を近くせり

なす術のなく蟻螂の流れゆく

走り根の締め付くる山獺期来る

炉話の声低くなる怖くなる

何かしら攪み厚着の母が起つ

子が宇宙考へてゐる霜夜かな

海鼠腸や正しき人に親しめず

冬晴の鳥居をくぐる赤ん坊

福岡 高倉 和子

東京 中田みなみ

血族の多き昔の大西瓜

ところてん突きて歌丸俵びけり

寄せられし草やはらかき盆の道

新盆と知りて慎む門火跡

盆僧の匂ひ残して去りにけり

口中に土の香残る衣被

曼珠沙華からりと晴るる盆地かな

ひぐらしのつつましく鳴きそれつきり

傷口のやうに柘榴の割れにけり

楽屋口役者に続く胡蝶蘭

万策の尽きたるごとく蛇穴に

琴の音に消されし秋の作り滝

墳山に傾く祠赤のまま

正餐に招ばれし心地胡蝶蘭

畳より赤子を掬ふ良夜かな

米を磨ぐ音や身に入む日暮あり

福岡 柴川志津子

熊崎 荒井千佐代

こともなく颱風過ぎし朝餉かな

シスターが水打つ裳裾すこし上げ

秋晴やなだるることく園児来る

猫の耳触れて怒らす野分かな

秋刀魚焼くための七輪捨てられず

ルノール展出つや運河に秋落暉

門ひらく農学校の菊日和

病室より母校の見える秋初め

秋草や埋もれはせぬか子の墓域

観覧車回つてゐたり原爆忌

思ひ出は野菊一枝くれしこと

病窓に秋の西日の張り付きて

木の実落つる音に暮れゆく秘仏堂

真つ白き秋雲のもと退院す

かあさんとつづやいてみる秋の暮

片足を方舟に乗せ大花野

埼玉 服部 早苗

福岡 岸 洋子

草笛を吹きしか父に聞かざりし

体の水日々入れ替へて暑に籠る

残る火に闇のかぶさる大文字

炎天を来て熱き茶をもてなさる

渋る火のややあり左大文字

摺むところなき日盛りの外階段

妙法の火のあるといふ闇うすし

炎昼や欠伸抜けゆく猫の胴

帆のゆれて船形の火の真正面

火星接近たつぷりと水を打つ

屋根の上のまだ燃えんとす鳥居形

蟻地獄覗けり眼鏡かけ直し

六道珍皇寺

鐘ひとつついてこの世や白木槿

一日過ぎひと日老いゆく夜の蝉

孕む身を仏足石にいぼむしり

九十を樂しと茄子の花盛り

北九州 深川 淑枝

秋澄むや遠き目をして檻の猿

象の耳はたりと秋の風を打つ

花野駆け網目のうすききりんの仔

狩心忘れうとうと獅子眠る

縞馬の縞揺れやすき葦の花

熊鷹の銜へしもの雫して

獣園の柵より高く秋の蝶

飼育舎に束ねし箒鳥渡る

広島 戸栗 末廣

噴水の上いつしかに星二つ

赤とんぼ旧軍港に群がれる

子規の忌の草々種をこぼしたる

銀漢や死んでしまへば片思ひ

蝸の鳴き尽したる松林

海を来て山へ去にけり秋ついで

一通の文の行方や雁渡し

魚のかげ二手に釣瓶落しかな

福岡 角野良生

見えてゐる遠さに海女の浮き沈み

小さき子が一番小さき子に螢

すこし降りそのまま梅雨に入りにつけり

朝刊を取りに出て草引いてをり

六方を踏みて去りけりはたた神

灯火管制の夜のあの天の川

沖の闇より流灯を引く力

いち日がふはりと閉まる冷蔵庫



太宰府 西住三恵子

来世てふ言葉の美しや夕端居
山の影山に沈めてつくつくし
留守電にまかす留守番秋暑し
眼薬はおほ方頬に秋日和
来てくれて帰つてくれて秋涼し

福岡 亀井紀子

初紅葉神仏交じる朱印帳
目に見えぬものは畏し秋高し
稲雀義民の話受け継がれ
落とし湯に巻かれてゆきぬ秋の蠅
けふもまた母を確かむ白障子

福岡 山内碧

切株を踏めば水噴く大刈田
柿照るや開けつ放しの家ばかり
校舎の灯すべて消えたり虫のこゑ
駆け抜けて朝露まみれ登校す
山を見てかがめば露の世界かな

福岡 栗原京子

とれたての野菜に微熱夏来たる
高原に使はれぬ椅子夏の果
宣誓の左手胸に秋の空
苺ゼリー揺らし一揆の結末を
バス停に椅子ほしき日や秋うらら

太宰府 山本 則男

珈琲に砂糖たつぷり通明忌

抒情とははるかなるもの通明忌

鬼も蛇も手なづけてゐる生身魂

撫で肩の母に似てゐる茄子の馬

すこやかに老人の日の暮れにけり

千葉 原 友子

墓石に杖凭せ掛け秋日和

嫁となり姑となり秋茄子

松籟に浸りて水の澄みゆけり

繕ひの黒糸ばかりちちろ鳴く

畦道に聳え殿様ばつたかな

北海道 押田 裕見子

水と塩舐めて命をつなぐ夏

水際に散りし花びら夏終る

激震の月の明りを待みとす

墓石にも傘を差しかけ雨の盆

誰も彼もいづれ仏に盆の月

長崎 松尾 龍之介

霊園を抜くる近道白日傘

待てば来ず待たねば来る秋の声

浜鳴の一羽を好む無彩色

外野ほど秋草深きグラウンド

彼岸花は黄泉へと続く潜望鏡

東京 今井康子

蝉しぐれ水占みづうらの文字浮かびくる
灯の消えて川音還る夜涼かな
はたた神下からも雨はね上がる
ト口箱に泳ぎさうなる秋刀魚の日
二人ゐて今はもう秋海の駅

兵庫 林 徹也

秋冷や背筋正しきミサの列
三代のシンガーミシン菊日和
酔ひ覚めの厨の闇やちちろ虫
根こそぎの流木どかと秋日影
卒塔婆も杖も流木雁渡る

東京 山田正子

走馬灯水色となり回りけり
送り火の消えて面影立ちにけり
白き物まつ白にして天高し
病葉の落つるや緑残しつつ
叱られて石蹴りながら花野まで

粕屋 吉田 菫

蕃椒村は百年音たてず
蝸に寝て蝸に目覚めたる
稲架を組む二人に糸のあるごとく
奉納の新藁納屋に高く積む
蝻螂の横ざまに蛾を啖ひをり

熊本 松田明子

後めたささらさなくて毛虫焼く
棉吹いて畝に正しき間合あり
子を連れて姪の立ち寄る地藏盆
重ねては崩るる寺の藺座布団
甲冑の座るかたちにお風入

直方 曾根富久恵

涼新た楽しくなりぬ厨ごと
敬老の集ひに名前を書けといふ
真つ先に朝日の当たる鳳仙花
曼珠沙華折るたび指の濡れてゆく
普段着の姑の遺影秋深し

福岡 田代貞香

蝉しぐれ背筋くづさず鶴を折る
竹山の風青々と走り蕎麦
熱気残る回送電車星月夜
時に子を遠しと思ふ秋夕焼
指で回す昔の電話秋の風

大野城 森田明成

生返事して秋扇しまひけり
喜んでばかりをられず敬老日
十六夜に足を取られて帰りけり
場外の香具師もにぎはひ秋祭
住み着きて縁はうすし秋の風